

## ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生（四）

——『バルザズ・ブレイス』以前のラヴィルマルケ——

梁 川 英 俊

### X ブルターニュ・ナショナリズムの高揚

ジャン・フランソワ・マリー・ルゴニーデック

ラヴィルマルケの筆を通して先鋭的な形で現れたブルターニュのナショナリズムは、しかしけっして彼一人のうちで醸成されたものではなかった。それはたしかに極端に誇張されたものであったとはいえ、紛れもなく一八三〇年代後半におけるパリのブルトン人サークルの雰囲気を反映してもいたのである。

ここで再び、この時代の「アシュランス・ジェネラル」の周辺に目を転じてみよう。なかでも一人の人物に焦点を当てなければならぬ。在野のブルトン語研究家、ジャン・フランソワ・マリー・モーリス・アガート・ルゴニーデック *Jean-François-Marie-Maurice-Agathe Le Gonidec* である。ブルターニュのナショナリズムの覚醒は、この人がパリの地を踏んだときにはじまるとも言えるからだ。まずは手短にその生涯を見よう<sup>(1)</sup>。

ルゴニーデックは一七七五年、レオン地方はル・コンケに生まれた。その前半生はけっして平穏なものではない<sup>(2)</sup>。生

ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生（四）

後わずか十七ヶ月で母を亡くすと、父は彼を養子に出す。養父母は裕福で教育熱心だった。十二歳のとき寄宿生としてトレギエのコレージュに入った彼は、そこで同級生だったラヴィルマルケの父親と知り合う。だがこのコレージュはルゴニーデックが十七歳になろうとしていたとき、大革命によって閉鎖されてしまう。しかも「反革命」のレッテルを貼られた彼は、革命派から追われる身となった<sup>(3)</sup>。

大革命期のルゴニーデックの行動については「伝説」が多い。なかでも、一八九三年、ブレストの路上で逮捕され、ギロチンに架けられる寸前に友人によって救われたという話は、後年彼が好んで語るところであった。イギリスに渡り、ある婦人の家で一年ばかり客となったという話もある。同名の人物を港で待っていた女中が人違いをしたというのがこの顛末だが、真偽のほどは定かではない。モルビアンとコート・デュ・ノールで内戦に参加して重傷を負ったともいう。あるいは再びイギリスに渡り、そこから名高いキブロン<sup>(4)</sup>の遠征に参加したとも伝えられる<sup>(4)</sup>。しかし、この時期の彼の消息で実際に資料によって確認されているのは、一八九三年に逮捕されてカレーの監獄に収監されたということだけで、翌年釈放されてから一八九七年までの足跡は明らかではない<sup>(5)</sup>。

この革命期の混乱はまた彼がブルトン語研究に手を染めるきっかけも与えた。ルゴニーデックは、幼少期に話していたブルトン語を、成人してからはほとんど忘れてしまっていた。素性を知られぬよう農民に紛れて暮らしていた彼は、ある日出くわした憲兵からブルトン語で尋問される。彼は答えることができなかった。幸い一緒にいた子供の助けで危うく難を逃れたが、このとき彼はもう一度ブルトン語をやり直す決意を固めたというのである<sup>(6)</sup>。いずれにせよルゴニーデックのブルトン語研究が、こうしたきわめて個人的な動機から出発していたことは注目されていい。

一八〇五年、そんなルゴニーデックに「ケルト・アカデミー」の設立という願ってもない出来事が起こる。当時パリにいたルゴニーデックは、早速その会員として名を連ね、その年の六月八日、コート・デュ・ノール県の「ランレフ教会堂」

Temple de Lanleff に関する簡単な発表を行い、翌一八〇六年には『ケルト・ブルトン語文法』 *Grammaire cello-bretonne* を刊行し、その功績によってアカデミーの一年任期の秘書に任命されている。一八〇八年発行の『ケルト・アカデミー年報』には、ブルトン語のレオン方言による『放蕩息子のたとえ話』 *Parabole de l'Enfant prodigue* を発表、翌年も同じ雑誌に『ギリシャ語およびドイツ語に類似したブルトン語の語彙の一覧表』を掲載している。「ケルト・アカデミー」というとどうしても「ケルトマニア」のいかかわしいイメージが付きまとうが、ルゴニーデックの仕事はそうした似非学問とはつきりと一線を画すものだった<sup>(7)</sup>。

しかし、彼のパリ暮らしも長くなかった。「海軍森林管理課」 *Administration forestière de la Marine* の官吏であったルゴニーデックは、一八一二年のハンブルクを皮切りに、ナンシー、ナント、ムーランとつぎつぎとその任地を変える。一八一八年、ようやくアングレームに安住の地を見いだしたルゴニーデックは、そこで人生でもっとも多産な時期を迎えることになる。『ケルト・ブルトン語辞典』 *Dictionnaire cello-breton* (一八二一年)、『ブルトン語難語辞典抜粋』 *Extrait du glossaire breton* (一八二三年)、『歴史的カテキスム』 *Katekiz historik* (一八二六年)、『ブルトン語新約聖書』 *Testament Nevez* (一八二七年) と成果は矢つぎ早に発表された。

なかでも、ここでとくに触れておきたいのが『新約聖書』のブルトン語訳についてである。この翻訳を企画したのは、ロンドンの「英国ならびに諸外国聖書協会」 *British and Foreign Bible Society* だった<sup>(8)</sup>。聖書の普及と翻訳を目的に一八〇四年に設立されたこの団体は、ブルターニュが俗語訳の聖書をもたない稀な地方であることに注目した。一八一四年、この協会からの依頼に、「フランス考古学協会」が翻訳者として推薦したのがルゴニーデックだった。しかし、この話はその後英仏関係が険悪になると立ち消えになってしまう。この計画を復活させたのが、デヴィッド・ジョーンズ師 *le Rév. David Jones* だった。師は一八二四年から一八二五年にかけてブルターニュを旅し、ルゴニーデックとも面会するが、帰

国後間もなく病死してしまふ。後継者となったのは、ウェールズ人のトーマス・プライス師 *le Rév. Thomas Price* だった。ジョン・ヒューズ師 *le Rév. John Hughes* の著書『ブリテン人の時代』*Horae Britannicae* (一八一八—一八一九年) を通して、ウェールズがペラジウス派の影響を免れたのはブルトン人のおかげであったことを知った彼は、ブルトン語版聖書の出版こそがその恩義に報いる道だと考え、自らブルトン語を学び始める一方、資金調達のため積極的にウェールズの諸団体に働きかけた。

もつとも実際に計画が動き出すと、両者の間にはさまざまな齟齬が生まれた。なによりもウェールズはプロテスタント、フランスはカトリックの国である。プライス師はプロテスタントの慣例に従ってギリシャ語版聖書を底本として翻訳することを望んだが、ルゴニーデックはカトリックの聖書を作るべくラテン語のウルガータ聖書やルメートル・ド・サシの仏語訳聖書を参照して譲らなかつた<sup>(9)</sup>。そのうえ、カンペールの司教からも横槍が入つた。司教はルゴニーデックによる『マタイ伝』の翻訳を読み、その正確さは認めたものの、出版には難色を示した。高位聖職者は聖書の翻訳が民衆の手に渡ることを快く思わないだろうというのがその理由だつた<sup>(10)</sup>。

こうした紆余曲折はあつたものの、ルゴニーデックのブルトン語版新約聖書は、一八二七年にともかくも陽の目を見る。もつとも当初の意図とは異なり、印刷された千部のうち大半はウェールズで売られ、ブルターニュで普及することはほとんどなかつた<sup>(11)</sup>。しかし、それはルゴニーデックが続けて旧約聖書の翻訳に手を染めることを妨げるものではなかつた。

一八三三年九月、勤め先の海軍森林管理課が廃止されると、ルゴニーデックは身に合わぬ官吏の仕事に別れを告げ、五年間住んだアングレームを離れてパリに出る。そして、これから死去するまでの五年間が、彼の短いが充実した第二の人生となる。

## 首都のブルトン人コロニーの魂

さて、ここで思い出してみよう。ルゴニーデックがパリに来た一八三三年九月とは、どんなときであったか。それはまず、ちょうどエミール・スーヴェストルが『両世界評論』にブルターニュに関する最初の論考を発表したときであった。しかも同年十一月にはミシュレによるブルターニュ論も発表され、また同じ頃には、ラヴィルマルケも故郷カンペルレを出てパリに上つて来ようとしていた<sup>(12)</sup>。ルゴニーデックはまさに、首都でブルターニュをめぐる新しい動きが始まるようになっていたそのときにパリに現れたと言つてもよかつたのである。実際、彼の名はすでに首都のブルトン人の間では有名だった。早速、オーギュスト・ド・グルキユフの好意によつて「アシュランス・ジエネラル」に職を得た彼は、ほどなくパリのブルトン人サークルの中心的な存在になる。わけでも、ヴィクトワール通りのクルシー三兄弟の「屋根裏部屋」に寄り集つた青年たちは彼を慕つた。彼らはルゴニーデックを介して初めて真に故郷の言葉や文化を知り、徐々にそのブルトン人としてのアイデンティティーに目覚めていく。

なかでも熱心だったのは、ラヴィルマルケとブリズーだった。とくに父親がコレージュでルゴニーデックの同級生だったラヴィルマルケは、誰よりも彼に私淑し、毎晩同じ時刻に彼の家を訪ねてはブルトン語の教えを乞うた<sup>(13)</sup>。彼はこう回想する。「親切にもルゴニーデックは、そのときまで私が規則も知らずに話していた言葉を理論的に教えてくれたし、また私が当時出版しようとしていた民衆歌のテキストにもたいそう興味を示してくれた。綴り字や単語や文章に不適切なところがあれば正してくれたし、表現を説明してくれたりもした。私が錯綜するいろんなヴァージョンに足を取られて身動きできなくなると、脈絡を見つけ出して救ってくれることもしばしばだった。私は『バルザズ・ブレイス』の初版で、私がかんたんに彼に感謝しているかを述べた。三十年経つたいまも、その気持ちは少しも変わらない<sup>(14)</sup>」。

一方、ラヴィルマルケより十二歳年上のブリズーも、熱心さという点では劣らなかつた。それどころか、彼はルゴニー

デック自身から精神的な後継者と目されてもいたのである。実際、『マリー』で一躍評判となったこの抒情詩人は<sup>(15)</sup>、ルゴニーデックと出会うことで、パリでブルトン語の詩人になる。それも故郷バ・ヴァンヌ地方のブルトン語ではない。ルゴニーデックに教わったレオン方言によるブルトン語の詩人になるのである。一八三七年に出版された最初のブルトン語の詩集は、十六ページばかりの小冊子で、『アルモリカの豎琴』*Telenn Arvor*と題されていた。ラヴィルマルケはこう証言する。「ブリズーは好んでルゴニーデックに自分のブルトン語の詩を読んで聴かせた。しかも、彼に聴いてもらわずに一篇の詩も作れなかった。『アルモリカの豎琴』には、ルゴニーデックが手を加えた箇所が少なくない<sup>(16)</sup>」。

ルゴニーデックは、ブリズーやラヴィルマルケにとって、まさに彼なくしては何も始まらないというような不可欠の存在だったのである。もつとも、その教えを受けたのはこの二人にとどまらない。クルシー兄弟、なかでもブルターニュ関係の著作を準備していたポールとアルフレッドも一再ならず彼に助言を仰いでいたし、『両世界評論』の論考を執筆中のエミール・スーヴェストルも、しばしばルゴニーデックに不明の箇所を訊ねていた。最古のブルトン語テキスト『聖ノンの生涯』*Buhez Santez Nom*の翻訳の仕事も、最後の頼みの綱とばかりにルゴニーデックのもとに持ち込まれたし、わざわざ故郷の方言で詩を作って見せにくるル・ジュビウー神父 *abbé Le Joubiou* のような人もいた<sup>(17)</sup>。さらに地方から手紙による教示の依頼もあった。なかでもトルード大佐 *colonel Troude* は、一八二七年にアングレームでルゴニーデックと会って以来ブルトン語の虜となっていたが、その慧眼でしばしば彼を驚かせた。このエコール・ポリテクニク出の士官は、ルゴニーデックの死後、『フランス語ブルトン語基本語辞典』*Vocabulaire français-breton*をはじめとする師の遺稿の出版に尽力することになる<sup>(18)</sup>。

いつしかパリのブルトン人青年の間では、「ルゴニーデックに訊きに行こう」という合言葉ができていた<sup>(19)</sup>。ブリズーはルゴニーデックをのちに「首都のブルトン人コロニーの魂<sup>(20)</sup>」と評したが、それはけっして誇張ではなかったのである。

## ブルターニュの宴

ところで、ブルターニュとその言語のために献身的に働いたとはいえ、ルゴニーデックはけっしてナシヨナリストではなかった<sup>(21)</sup>。しかし彼と接触してブルトン人としてのアイデンティティーに目覚めた若者のなかには、その愛郷心を一気にナシヨナリズムにまで高揚させる者もいた<sup>(22)</sup>。彼らはしばしば過去のブルターニュの独立を過大評価し、安易にブルターニュ対フランスという対立図式を振りかざした。ラヴィルマルケはさしずめその代表格だった<sup>(23)</sup>。しかも彼らの昂まる故郷への想いは、それを狭い同郷人のサークルのうちに留めておくことを許さなかった。師のルゴニーデックを、そして目覚めはじめた新しいブルターニュを人々に知らさなければならぬという使命感は、やがて彼らにそのナシヨナリズムを外部に向けて発揚する場を求めさせるようになる。こうして企画されたのが「ブルターニュの宴」であった。

最初の宴は一八三六年に催された。もともとラヴィルマルケやブリズーが大いに宣伝に努めたにもかかわらず、この会はそのほど評判にはならず、残念ながら詳細は知られていない。ただブリズーがブルトン語で書いた最初の作品を読み上げたことが伝えられているくらいである<sup>(24)</sup>。しかし『ブルトン人の歌』*Kanaouenn ar Vretoned*と題されたその歌は、ブレストの日刊紙『アルモリカン』*L'Armoricain*に掲載されたほか、俗謡刷りとしても多数印刷され、ブルターニュ中で愛唱されることになった<sup>(25)</sup>。

一方、翌一八三七年二月に開かれた二度目の会は評判を呼んだ。招待客にはシャトーブリアンやラムネーなど首都に住むブルターニュ出身の有名人が名を連ね、その豪勢な様子はナントの正統王朝派の新聞『エルミーヌ』でも大きく報じられた<sup>(26)</sup>。開会の挨拶に立ったルゴニーデックはこう述べた。

私がこの会合の目的をきちんと理解しているとすれば、今日私たちをここに集わせているのは、ブルトン人にとって

なによりも貴い「祖国」への愛です。(……) 私はブルトン語が私たちの賞賛に値するものであることを示すべく、わが人生の三十年以上を捧げてきました。(……) ブルトン語を忘却や中傷者の悪意から救おうと欲し、学者たちに切り拓くべき新しい道があることを明らかにしました。(……) 学問や文芸の泉に身を浸すべく故郷の山々を出てパリに來た勤勉な若者たちは、気晴らしの種にこと欠かぬこの都で、先祖たちの質朴な風習を散文や韻文で称揚すべくその余暇を捧げております。(……) 私たちは、私たちに固有の言葉をいまだに保持していることを誇りに思おうではありませんか。そうすれば、私たちが長く独立不羈の民であり、優れて愛国的な民であり、過去に誇るべき栄光をもつ民であり、つねにつきぎの言葉を金言とする民であることもまた記憶されることでしょう。「ブルトン人よ、永遠なれ」<sup>27</sup>。

その後宴会は、ブリズーやラヴィルマルケやポール・ド・クルシーなどによる乾杯や挨拶、そして数々の歌で盛り上がった。なかでもラヴィルマルケは、『ブルターニュの自由』*La Liberté Bretonne*と題されたつぎのような自作の頌歌を披露した。

皆の衆、耳を傾けよ。― 静粛に、

われわれは歌いたいのだ、フランスの真中で

歌いたいのだ

一篇の頌歌を、ブルトン人のために

かつて、先祖たちは陽気だったが、



いま、われわれは泣いている、

とまれ、兄弟たちよ、幸福はまた来る、

われわれはいまもブルトン人なのだから。

先祖たちは自由だったが、われわれは鎖につながれている、

しかしその鉄鎖を、いつか打ち砕くだろう、

われらが体内にはなお彼らの血が流れる、

われわれはいまもブルトン人なのだから。(……)

そう、再び見ることでろう アーミンの紋章が

われらが大隊の上に翻るのを。(……)

そう、われわれもまた、先祖たちのように、

大いなる日にはこう言えるだろう。「ともに死のう」と<sup>(28)</sup>。(……)

さて、一読して一年前に発表された『バルデイスムの名残』を彷彿とさせるこの頌歌は、その歌詞が『エルミーヌ』紙上に掲載されるや物議を醸し出した<sup>(29)</sup>。ブレストの新聞『アルモリカン』*L'Armorican* は、この歌の内容を「かなり奇妙だ」と論評した上で、戸惑いがちにこう書いた。「ド・ラヴィルマルケ氏はメルクルの子孫の誰かを君主に擁立してブルターニュ公国を建国したいのだろうか。これは些かウルトラ・ブルトンではないだろうか。はっきり言って、われわれ

